れた浅井先生と一緒にジープで旅行する機会がなかったのは残念なことである。いまになって先生と一緒に旅行しながら，先生の造詣の深い土地生産力や地誌についてのお話を伺い，かつ大切なジープを有効に使ってゆきたいと思っている次第である。

浅井先生の側面

貝山久子

浅井先生は大学へは大ていお弁当をお持ちになる。ここ数年は御飯でブック型のお弁当箱に一面魚・野菜を主とする数種類のお菜がところせましと並んでいる。その種類と量の豊富さに脱帽してしまうが，必ず野菜の煮物の二・三種類が副えられており，また地方の珍味などもあって，時々おすそわけにあずかることもある。主菜のお魚は先生が大学の帰りに，大塚駅付近の魚屋でまとめて買って帰られ，加工してフリーザーに保存されていたものであることもあり，また時には先生が自らお弁当をとゝのえられることもある。

以前は精養軒の雑穀入りの無漂白のパンをナイフで切って召し上っていたが，お菜は大きなタッパーウエアに入れて持参されていた。種類と量が豊富であったことは言うまでもない。先生は食べることにかなり関心を持たれ，バランスのとれた食事こそ健康維持の条件，と考えて居られるようで，好き嫌いなく何でも召し上り，亦珍らしいもの（ゲテものではない）を召し上るのがお好きのようである。これは浅井家の家風のようにもお見受けするので，次女の文栄さんが埼玉大学教養学科の卒論に“食事文化論”を選ばれたのも故なしとしない。先生には今後ますますグルメぶりを発揮して頂きたいものと思っている。

× × ×

浅井先生には３人のお子様がお有りになるが，その中お２人はお嬢さんである。お父様としての先生がどういう方か直接うかがったわけではないが，普段はあまりきびしくなく，理解のあるやさしいお父様のような気がする。昨年退職されたが，浅井夫人は戦後ずっと小学校に勤められていたので，浅井家の家事一切，御病気の治平先生やその付添さんの食事の世話まで，長女の建子さんがよくとりしきられていたようである。先生はフリーザーや電子レンジをいち早く購入され，“結婚した時に使い方を知らないと困るから－”とおっしやって建子さんの家事の合理化を援けられた。建子さんの御結婚の時に“とても手離すのを惜しいとお思いになりませんか”とぶしつけに伺ったが，“世間の父親はそうらしいが，自分はちっとも淋しいとも惜しいとも思わない”と真顔でおっしやった。これはきっと長い間の建子さんの御苦労を多とされてのお言葉ではなかったかと思う。

次女の文栄さんは治平先生のおもざしを受け継がれた大らかでスケールの大きな方で“ゴーイングマイウエイ”の信念に満ち満ちていらっしやる。高校時代に先生は奥様に代ってPTAの集まりに出席したりもなさった。文栄さんの卒業論文のコピーを私もみせて頂いたが，ところどころにうすい鉛筆の細字で先生のかきこみがあった。文栄さんは大学卒業後さるベーカリーでアルバイトをされた後栄養短大に入られ，この春卒業される。今後どのような活躍をされるか先生と同じ位に私もたのしみに

している。

× × ×

“定年になるのを淋しがる人もあるようだが自分は早く暇になって，心ゆくまで実験をしたい”とおっしやったことがあった。これは高校長在任中のとくに雑用が多かったころのお言葉だが，退官されたあとこの希望をどのように実現して行かれるのか大いに期待しているところである。

浅井辰郎先生御退官記念号にことよせて

渡　辺　　光

旧臘，お茶の水女子大学地理学教室からの来翰により，浅井先生の御退官の間近いことを悟り，今更乍ら月日の経過の早いことを思い知らされた次第である。大方も御存知ではあろうが，御着任当時先生は既に完成した学者としての名声と地位とが共に確立しておられたにも拘らず，枉げて本学にお出でを願ったのである。いま当時の事情を振り返って見ると，本学は大学昇格以後次第に内容の充実を見つつあったとは言え，まだ大学院の設置やその他の条件に於て，旧制大学に比して格段の遜色があったことは否めなかった。同時に，地理学教室にあっても，将来の相当長期に亘る期間に指導的な役割を果して戴く方をお迎えして置くことの必要性が痛切に感ぜられていた時期でもあったのである。

このような，完成された指導性の豊かな方をお迎えすることは，どの学問の分野でも困難なことは言うまでもないが，地理学はこの感を特に深くする分野である。それは地理学の内容の本質に根ざしていることによるからである。

昔から言われていることではあるが，地理学の内容には二つの，一見相容れない観のある分野がある。一つは数理的伝統Mathematical traditionに属する方面であり，いま一つは文章的伝統Literally traditionの方面である，しかもこの両分野の調和のとれた融合の上にこそ，地と人とを一つとして見ることを通しての地域性の解明や，地域間の比較，関係を考察すること，すなわち，Ritter以来の地理学の基本概念であるLandschaftbegsiff（regional concept，地域概念）に基づく考察対象の地理学的考察がはじめて可能であるからである。

幸いにして浅井先生は夙にこのような識能を十二分に具備された方である。このことは，先生の天賦の才に因られることは言うまでもないが，履歴も大きく与っているものと思われる。幼にしては日本の地理学界の黎明期の学界の先達であられた厳父治平先生の膝下にあり，京都大学文学部史学科に学んでは，人文地理学の教室にあって，修辞学に特に厳格な小牧実繁教授の薫陶の下に地理学の研鑽を積まれる傍，学部の壁を越えて理学部と深い接触を保ち，特に地球物理学教室の気象学担当の滑川教授からは基礎，応用方面に亘る万遍なき指導を享けた。浅井先生の後年の完成された地理学者としての基礎には，このような長きに亘る基礎固めがあったのである。

実は，先生を本学にお迎えしたいという希望は，御着任の２年程前から抱かれていたが，諸般の事情を考察すると，到底不可能ではないかと半ば諦めていた。しかし相当の無理を押してお願いした結果，前任校法政大学の寛大な御容認によって本学へのお迎えが実現したのである。今定年御退官を迎